**********第 2 回認知運動療法アカデミア**********

「脳の鏡、そして船は行く」

―手と足（歩行）の機能回復と認知運動療法―

第 2 回認知運動療法アカデミア　[プログラム]

講師
宮本省三(高知医療学院)
池田耕治(熊本リハビリテーション学院)
高橋昭彦(高知医療学院)
鶴埜益巳(高知医療学院)

第 2 回認知運動療法アカデミアを「脳の鏡、そして船は行く－手と足(歩行)の機能回復と認知運動療法－」と題して、教室から太平洋の水平線が見える「高知医療学院(高知市)」で開催する。アカデミアは認知運動療法士のための臨床道場である。したがって、今回も認知運動療法士の臨床実践能力を厳しく鍛えることになるだろう。

［手の観察・・・所定の項目に従った評価］

まず、「手の観察」、特に「所定の項目に従った評価」の実際をマスターする。これは第 1 回アカデミアで十分に説明できなかったところである。複雑な脳の病態の評価なくして複雑な訓練は実践できない。ここが日頃の臨床を見直すための再出発点となる。

［そして船は行く・・・足（歩行）の認知運動療法］

人間は直立二足歩行の後、手の自由度を獲得した。座ること、立つことによって四足歩行から解放された「手」は、大地(地面)を知覚する仕事を「足」に任せ、より広い世界の探索へと向かった。それを背後で支えたのが足である。進化的に足は手の本来の仕事をも引き受けなければならなかった。四肢で大地を知覚する仕事を二足で行わなければならなくなった。それが「足の細分化」を生んだ。足は手を支えている。手と足は夫婦である。

実は、この「足(歩行)」というテーマは満を持したものである。1994 年に沖田氏とスキオ病院を訪問した時、「足」についての講義をペルフェッティ先生から受けた。その時、「足は海に浮かぶ船のようなものである」と教えられた。それ以後、断片的に「足の訓練」は紹介したが、多くは座位での訓練が中心であり、歩行の機能システムや歩行周期に対応させた訓練展開の説明は十分ではなかった。その後 2004 年―2005 年のサントルソでの研修中にリゼロ先生から立位での歩行周期に対応させた片麻痺の歩行再教育訓練を学んだ。そして、臨床経験を少しづつ積みながら、2007 年の第 1 回のアカデミアで「歩行の機能システムとワークユニット」の基本的な考え方を紹介した。今は 2006 年―2007 年にサントルソで研修した高橋氏や鶴埜氏と論議を続けている。気がつくとスキオ病院で「足」の講義を受けてから既に十数年が経過している。満を持して、第 2 回アカデミアでは「歩行の再教育訓練」を提示し、参加者にマスターしてもらう。

歩行の再教育訓練。これは実技(技術)の世界でもある。模倣できるかできないか、ミラー・ニューロンを活性化する必要があるだろう。認知運動療法士の才能とセンスが問われるは

ずである。歩行の機能回復への患者の期待は強い。単なる歩行訓練は治療ではない。「歩行を制する者はリハビリテーション治療を制する」と言っても過言ではないだろう。しかし、日本にはまだ、この技術を完全に習得した認知運動療法士は一人もいない(残念ながら講師陣もまだ完全にマスターしていない)。それで片麻痺や整形外科的疾患における歩行の再教育ができるはずがない。認知運動療法による歩行の再教育訓練が導入されれば、日々のリハビリテーション訓練室の臨床を大きく変えることができる。歩行の改変もまた、脳の認知過程(知覚、注意、記憶、判断、言語)の改変の結果である。

さらに、認知運動療法士がこの方法論の理論と技術を身につければ、歩行の機能回復を自らの技術が確かに操作しているという実感の領域に入ることができる。この実感を感じ取ってほしい。きっと、心がときめくはずである。そして、新たな大地が水平線の彼方に見えてくるだろう。そこに向かって船は行く。

［脳の鏡・・・手の認知運動療法］

次に「手」、「脳の鏡(Napier の言葉)」と題して手の訓練を見直す。2008 年 2 月のサントルソ認知神経リハビリテーションセンターにおけるマスターコースの内容を短時間だが講義で再現する。そして、手に対する「新しい仮説、新しい治療」を探求し、論議し、創造し、サントルソに日本側からの提案として報告する。新しい訓練が創造できなければ提案にならない。ここでは参加者一人一人の「想像力」と「ひらめき」が問われるだろう。もちろん単なる訓練の思いつきではいけない。新しい理論仮説と訓練方略(道具の開発・訓練の内容や方法)でなければならない。

今、同じ論議を、イタリアの認知運動療法士たちも行っている。これはペルフェッティ先生の提案による現在進行形の日伊合同研究である。日本の認知運動療法士の実力を見せてほしい。片麻痺の手はまだ完全回復していない。これまでの手の訓練のままでよいという根拠は、どこにも見当たらない。2008 年 2 月のマスターコースに参加したり、その報告を地方の勉強会で聞いた認知運動療法士は、もう既に新しい訓練を考え始めていることだろう。そうした認知運動療法士には、新しい訓練のアイデア(方法論)と道具や物体を「高知」まで持って来ることを要求したい。ゼロからではなく、そのアイデアの紹介から論議を始めたいので、冗談ではなく本当に持って来てほしい。

新しい手の訓練を創造するためには、ちょっとした思考の飛躍が必要である。

第 2 回認知運動療法アカデミアは実技中心の内容になるだろう。つまり、参加者が行為することで学ぶ 2 日間にしたいと考えている。

行為しなければ何もわからない(ゲーテ)。
希望が到来するように行為せよ(河本英夫)。

桜が満開の高知でお待ちしています。
実習できる服装で来てください。

アカデミア・コーディネーター
宮本省三

■2008 年 4 月 12 日(土)

AM 9:30　受付

AM10:00　［手の観察］－所定の項目に従った評価－
1.「片麻痺の手」－運動の特異的病理、感覚、運動イメージ、情報変換、模倣－・・・宮本
2.「手の評価(実習・グループワーク)」
　(A)グループ・・・宮本
　(B)グループ・・・高橋
　(C)グループ・・・鶴埜

PM1:00　［そして船は行く］－足(歩行)の認知運動療法－
1.「足と歩行と認知運動療法」・・・宮本
2.「片麻痺に対する歩行の再教育訓練(実習・グループワーク)」
　(A)グループ・・・宮本
　(B)グループ・・・高橋
　(C)グループ・・・鶴埜

PM7:30・・・「懇親会」

■2008 年 4 月 13 日(日)

AM:9:00　［脳の鏡］－手の認知運動療法－
第 1 部「手の訓練の見直し」－2008 年 2 月、サントルソ・マスターコースより―
1.　手のリハビリテーション・・・カルロ=ペルフェッティ(論文提示)
2.　世界を探索する手・・・・・・ゼルニッツ(宮本)
3.　手の運動イメージ・・・・・・カーラ・リゼッロ(池田)
4.　手の治療計画・・・・・・・・ゼルニッツ(高橋)
5.　サントルソにおける手の治療・・・鶴埜

第 2 部「新しい仮説、新しい治療」－手の訓練を創造するための日伊合同研究―
(A)グループ・・・宮本
(B)グループ・・・池田
(C)グループ・・・高橋
(D)グループ・・・鶴埜
・各グループによる研究発表

PM3:00 終了

[連絡事項]

*アカデミア終了後、希望者のみ坂本龍馬像の立つ「桂浜」観光(高知医療学院より車で5分)。

*参加費、懇親会費、昼食(弁当代)などは当日支払いとします。

*懇親会費は4000円(予定)としていましたが、会場の貸切・時間延長(3時間・飲み放題)により4500円に変更となりました。申し訳ありませんが御了承下さい。

*高知医療学院は駐車可能(無料)です。

*4月12日の夜の懇親会は高知市の中心街(追手筋)が会場となりますので、ホテルは「追手筋・はりまや橋・高知駅」周辺が便利です。前日の4月11日に高知入りする方々は夜6時—9時の間に大橋通りの「ひろめ市場(気楽な屋台風の店の集合体)」で食事すれば、土佐料理(鰹の塩タタキなど)などを安く楽しめます。自由参加ですが、アカデミア参加者を見かけたら声をかけて一緒に楽しんでください。また、13日の早朝6時より追手筋では数キロにわたる「日曜市」が開かれています。ぜひ、高知の田舎を体験して下さい。

*高知空港から高知医療学院(桂浜方面・長浜の愛宕病院隣)までは、高知空港からバスではりまや橋又は高知駅(40分)、はりまや橋から高知医療学院までタクシー(20分・2000円程度)が便利です。なお、高知医療学院からホテルや空港などには、参加者が複数でタンシーに乗り合いしますので安く帰れます。